

デジタル雑感

関西支部長 高橋 明



一日の仕事の最初はメールチェックからというスタイルが大分前から続いている。光ディスクの規格化に関わることが多かったせいも、比較的早く、電子メールに接することとなった。そのため、電子メールとは何かと聞かれることが多く、「紙のメールと本質的に差はありません。」との説明をしていた。メールとしての機能は、遠隔地にテキストや図などの情報を届け、そしてそのまま保存も可能という点では、電子メールと紙のメールは同等である。ただ、発送にかかる手間が少ないことと、相手に届くまでの時間も非常に少ないことが電子メールの際立った特徴となる。

光ディスクの規格会議での資料は紙であったため、参加メンバーは他メンバーに配布する紙の資料を抱えて会議に参加し、他メンバーから配布された紙の資料を持ち帰っていた。しかし、その頃にはワープロが普及しており、会議の配布資料はワープロで作られており、データの電子化は既に終了していたように思う。

ワープロが専用機の時代からパソコンのワープロソフトへ移行し始めた後に、電子メールの波がやってきて、紙を介さない情報伝達の方へ流れが一段と加速した。その後、パソコンの表示デバイスがCRTから液晶になり、HDDをはじめとする記憶装置の小形軽量化が進んだ結果、パソコンの持ち運びが可能になった。

パソコンを持ち歩くようになって、会議のプレゼンが、OHPシートのオーバヘッドプロジェクタからパソコンからの信号で動くプロジェクタに変わっていった。このような状況ができてしまうと、電子化の流れが決定的になる。光ディスクの会議に重い紙の資料を持ち運びながら、記憶装置の開発に従事しているのに、一体何をしているのかと思っていた。しかし、各種のリムーバブルの記憶装置が開発され、状況は変わっていった。

パソコンの本格的なリムーバブルメディアはフロッピーディスクからで、その後、光ディスクの3.5インチMO、CD-Rなどが登場し、半導体の外部記憶装置が登場した。フラッシュメモリは、PCカードのインタフェースを利用したものからスタートし、急激に形を変えていった。

こういったパソコンの外部メモリは、互換性が問題になることが多かった。各国のノートパソコンが集まる会議では、データの読み書きでいろいろなトラブルを経験したが、最近ではパソコンソフトの対応が進んだせいも、USBメモリでのトラブルは聞くことが少なくなった。

電子メールの場合、互換性の問題は文字化けであろう。初期の頃は、送り手と受け手が異なるソフトを使った場合、組合せによっては文字化けが生じていた。特に半角文字と全角文字が混在すると要注意であった。送ったメールが相手に届いていることを確認するには、返信といった手立てが必要なもの、紙のメールと同じである。

今はいろいろなトラブルは少なくなったが、今度は、きちんと意図したものが伝達できかが心配になってきている。昔、メールは日に50通を超えると見落としが多くなると聞いていたが、多くの人がそれに近い状況になっている。

電子メールには添付資料が付くようになり、通信速度が上がってくると、大きなサイズのデータを添付で送るようになった。この結果、資料配布が電子メールで行われるようになり、パソコンの中にある資料の大部分が、電子メール経由で送られてきたものになり、メールボックスがいろいろな意味でのデータ保管場所になってきている。

情報伝送速度の向上傾向は続いており、メールの次に電子会議などで新たな段階へ進んでいく兆候が見えている。今後とも仕事のスタイルは、電子情報通信技術の発展の影響を受けていきそうである。